

今週の本棚

加藤 陽子 評

濱口雄幸伝 上・下

今井清一著（朔北社・上巻2310円、下巻2100円）

この本を手にした時、本が背負う運命といふべきものは、やはりあるのだと思った。五十余年も前に完成原稿ができていたにもかかわらず、さまざまな理由で刊行されずにきた濱口雄幸の伝記が、今という時代を選んで堂々、世に出てきたのである。

「広義の国防」に殉じた宰相 幻の伝記

濱口といっても、ライオン宰相の異名をとったその風貌をすぐに思い浮かべられる方は今やそう多くはないだろう。戦前期の日本で最も力があった政党内閣といえ、政友会を与党として1918年に成立した原敬内閣と、民政党を与党として19

29年に成立した濱口内閣の二つだった。その一方の雄であった濱口は、首相時代、戦前期の日本を大きく右旋回させる転機となったロンドン海軍軍縮条約締結をめぐる政治対立の中で、東京駅で撃たれた傷により1931年に死去する。その10年前、同じ東京駅頭では原首相が暗殺されていた。五・一五事件（32年）に倒れた政友会の犬養毅首相も入れれば、現職の首相の地位にあって暗

殺された者すべてが政党政治家であったという事実は重い。

本書は、大正昭和期の新聞人として知られた丸山幹治（丸山眞男の父）といった方が伝わりやすいか、が濱口家から伝記執筆を依頼されたことに端を発する。老齢の丸山幹治を助け、丸山の取材メモ、濱口家から提供された史料、大蔵省文書、枢密院議事要録、海軍関係史料等を用い、原稿用紙千枚を超える原稿としたのが著者の今井清一氏に他ならない。

今井氏は丸山眞男のもとで日本政治史研究を学んだ学者であるから、濱口伝の執筆は、濱口、丸山両家から氏に託された大切な仕事だったといえるだろう。

惜しいことには、完成後、清書1部が濱口家に提出されたほか、最終稿のコピー1部が高知市自由民権記念館に寄贈されたのみで、世には出

なかった。今回、この幻の一書が刊行されたのは、現在の日本の政治状況を考える時、まことに意義深いことだと思ふ。確実な史料を典拠とし、多角的な観点で書かれていたためだろう、現在の研究水準に照らして本書の記述が全く古びていないのにも驚かされた。

では、この本をひもとくことで、何が覚えてくるのだろうか。一つには、東アジアで今確かに起っている軍拡競争を考える際のヒントが得られよう。1930年に内閣が締結したロンドン海軍軍縮条約の兵

力量では、日本の国防が危ういとして条約の批准に抵抗した枢密院に対し濱口首相は、次のように反駁する。いわく、国防には広義と狭義の二つがある、狭義の国防は兵力量の大小にもよるが、広義の国防は、軍備だけでなく、外交の親善、民力

の充実を包含したもので、広義の国防こそが大事なのだ、と。外交と財政あつての軍備という濱口の明察は、今の時代にこそ思い出されるべき知見だろう。

二つには、軍縮条約の締結が日本の国益になると決めたが最後、断乎とした態度で反対派に立ち向かった濱口の格闘をたどる醍醐味が味わえる。海軍軍令部の反対を押し切って内閣が条約調印をおこなったのは統帥権干犯だと批判した枢密院顧問官に対して濱口は、統帥権も兵力量決定権も条約締結権も、すべて天皇の大権である、ならば、一つの大権が他の大権をいかにして侵犯できようか、として正面から反論を加えた。

枢密院が最後まで抵抗した場合、その正副議長を罷免する覚悟までを固めて対峙した濱口は、最終的に条約の批准を枢密院から勝ち取ることができた。

村山槐多（1896～1919年）は、むしろ画家として知られる。僕が槐多の絵を好きなのは、誕生日が同じ（9月15日）ということからではない。すさまじい気迫がほとばしるような、大胆で厳しい油彩や水彩に惹かれる。並行して、その詩にも衝撃を受ける。絵も詩も血の色。絵も詩も心そのまま。槐多が「充血せる君鬼薊」と綴る時、その眼差しはのなかに鋭く光る針が見える。明治から大正にかけての22年間を生きた天才の魂が、時空を超えて、今も飛翔している。

子どものころ、北原白秋や島崎藤村の詩、リ

グローバリゼーション・パラドクス

松原 隆一郎 評

ダニ・ロドリック著（白水社・2310円）

リーマン・ショックから5年 かったのは、政策にせよ制度にしか経ていないというのに、せよこれまで国家によってしか日本で経済政策と言えは「規制緩和」が切り札のように喧伝されてある。国際社会においては社会的機会費用を抑えるような「世界政府」つまり世界規模の公正

この3冊

池辺 晋一郎・選
詩集

①槐多の歌へる——村山槐多
詩文集（村山槐多著／講談社
文芸文庫／品切れ）

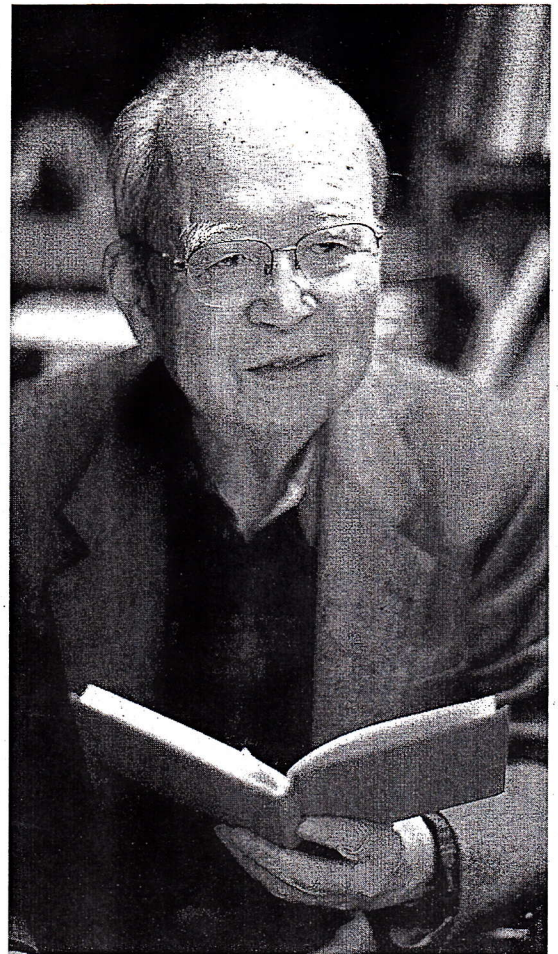
②立原道造詩集（立原道造著
／ハルキ文庫／714円）

③世界はうつくしいと（長田
弘著／みすず書房／1890円）

はまぐち おさち
■濱口雄幸伝 (上・下)

今井 清一さん (90)

政党政治を考えるきっかけに



原稿は、半世紀前に出来ていた。首相として金解禁や軍縮を行い、1930 (昭和5) 年に東京駅で狙撃され、「男子の本懐」と言った濱口雄幸。その生涯をたどった。もとは、政治学者・丸山眞男の父で新聞記者の丸山幹治が、濱口家から評伝執筆を頼まれ、取材を進めていた。だが老衰のため、眞男の教え

著者に会いたい

子で大学院生だった今井さんがひきついだ。今井さんは、幹治の取材メモ、濱口の日記、枢密院や海軍などの未公開史料にも広くあたり、原稿用紙千枚以上にまとめた。「丸山眞男さんは、文章のアクセントのつけ方など、手を入れてくれました」50年代後半、完成稿を濱口家に渡したが、幹治の死去もあって刊行に

は至らなかった。今井さんは日本近代政治史の研究を続け、横浜市立大学教授などを歴任する。

2006年に出た『丸山眞男回顧談』で、この原稿のことを知った編集者が今井さんに連絡。今こそ読まれるべきだ、と出版にこぎつけた。濱口の最大の課題は、政党政治に対する信頼回復だった。

「政策を世論に問い、その支持を背景に実現することをめざした。緊縮財政と金解禁でデフレ経済を立て直し、ロンドン海軍軍縮条約に調印して協調外交を進めようとしたが、そのために撃たれてしまった」

謹厳実直な人柄で信望を集めた濱口は、遭難の翌年に死去、葬儀には15万人が参列した。その後、1カ月も経たずに満州事変が勃発する。

「人々は前途に不安を感じたからこそ、濱口のように自ら責任を担おうとする政党政治家を惜しんだのでしよう。この本が政党政治の現在を考えるきっかけになれば」(朔北社・上2310円、下2100円)

文・石田祐樹 写真・郭允

読書

文庫

●講談社編『東京オリンピック 文学者の見た世紀の祭典』三島由紀夫、大江健三郎、石原慎太郎、小



新書

●近藤和彦著『イギリス史10講』ユーラシア大陸を挟んで日本の反対側に位置する島国イギリスは、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドの相